

## 高橋琢也と学生達 (疾風怒涛の物語) (1)

友田 燐 夫

Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

**【要旨】** 東京医科大学の源流は大正5年5月16日に日本医学専門学校を総退学した学生達と彼らを支援した高橋琢也らの応援者達のドラマチックな話に遡る。また、校歌に歌われている源流2つとは、学生達と順天堂の方々の応援者を意味する。本稿はこの2つの源流の中にあって強靱な精神力でもって東京医学講習所の開設、東京医学専門学校の設立を成し遂げた高橋琢也と学生達との暖かい交流の話を記述する。

### 目次

1. はじめに
2. 発端
3. 学生の総退学と新医学校設立運動の開始
4. 長委三美らの高橋琢也訪問
5. 長委三美の佐藤進男爵訪問
6. 高橋琢也の医学界重鎮や寺尾亨、高田早苗との交友関係
7. 学生達の森鷗外訪問
8. 長委三美の石黒忠憲男爵訪問

### 1. はじめに

「はじめに神話ありき、Im Anfang war das Mythos.」とはノーベル文学賞作家ヘルマン・ヘッセ<sup>1)</sup>の小説ペーター・カーメンチントの冒頭の一節である。この中でヘッセは子供達は日々の生活において自身の魂の中に神話を作り上げていると述べている。私達の揺籃の時代の記憶も神話の世界であるといえよう。東京医科大学の揺籃期といえば、日本医学専門学校を総退学し、新しい医学校の設立を目指した学生達のエネルギー溢れる話に尽きるのであるが、このようなドラマチックな開学の経緯は、故原三郎名誉教授が「はじめ

に学生一人を入れる学舎だになし」と述べた言葉が風化するほど、既に神話の世界に入りつつある。校歌の一番には、「源流二つ彼と此」と歌われている。「ヒポクラテスの名に寄れる」から始まるこの校歌の中で、「源流二つ」とは西洋医学と東洋医学の源流を指すと解釈されている。しかし、その真の意味は、東京医科大学の源流、すなわち日本医学専門学校の流れを汲む学生達と彼等を応援した佐藤進男爵と順天堂病院の方々のことを指している。そして、それらの人達の中心にいたのが高橋琢也であった。これらの源流については「神話の蔭に匂う<sup>2)</sup>」がごとく現在の私達には蒙昧な記憶となってきている。この一番の歌詞には、いず

2009年8月4日受付、2009年9月3日受理

(別冊請求先: 〒160-8402 東京都新宿区新宿6-1-1 東京医科大学生化学講座)

れは神話の陰となり忘れられてしまうであろう学生達とその応援者達の素晴らしい日々を思い出して欲しいと、「世々に広めし功 (いさおし) の仰がざらめや尊さを」の歌詞を通して密かに伝えている。高橋琢也と学生達の交流を中心とした東京医科大学の源流を探ることは今後の大学の発展を考えるうえで重要なことであろう。

大正5年5月16日、日本医学専門学校を総退学し行き場の無くなった四百数十名の医学生達が高橋琢也と邂逅し、それ以後20年に亘って織りなされた師弟の暖かい人間的な関係の物語は、東京医科大学の揺籃期における忘れ難い出来事である。本著では、本学に残された数少ない資料と高橋琢也の事蹟に関するいくつかの参考資料を紐解いて、日本医学専門学校を総退学した学生と、彼等の窮地を救い東京医学専門学校を設立した高橋琢也との人間的な交流を明らかにしたい。

## 2. 発端 (大正4年12月18日～大正5年5月15日)

大正4年の末は我国の近代の歴史でも最も穏やかな時期であった。第一次大戦は既に始まっていたが、主戦場は欧州であり、我国は軍需による好景気を迎えていた。この年の12月の初めに、日本に亡命したインド独立の志士ラース・ビハリー・ボースが、東京に潜入し、英国および日本の官憲により追跡されることとなった。ボースは中国辛亥革命の指導者・孫文の紹介があつて頭山満 (とうやま・みつる) や寺尾亨 (てらお・とおる) (後述) と新宿中村屋との連携により匿われるという事件が起つた<sup>3)</sup>。この時に使われた自動車は日本には数少ない高速自動車であった<sup>4)</sup>。この事件は「ボースの神隠し事件」として当時、一般にはその真相は知られることはなかった。むしろ12月18日に始まった帝都の一隅、千駄木の日本医学専門学校の医学生達によるストライキが、年を越すことになり、新聞の大きな記事となって社会を驚かすこととなった。

このストライキが起つた日本医学専門学校は、その前身は済生学舎という医学校であった。私学の医学校である済生学舎は明治9年、東京の本郷区千駄木に、長谷川泰の手によって創設された。済生学舎からは野口英世、吉岡弥生らが輩出したが、その設備は貧弱であり、明治36年には経営に窮して学校は閉鎖されてしまった。吉岡弥生が東京女子医専 (現・東京女子医科大学) を創設したのも、済生学舎の勉学環境が女子

にとって劣悪であったためといわれている。明治45年にその経営を新たに継承したのが山根正次 (やまね・まさつぐ) と磯部検蔵 (いそべ・けんぞう) であった。山根正次は萩藩の出身であり、東京帝大医学部を明治15年に卒業しドイツに留学した法医学の専門家であり、内務官僚となつたのち、衆議院議員となつていた。山根は医学部では森鷗外の1年下、北里柴三郎の1年先輩であったが、明治時代、30年にわたって我国の医学界を揺るがした脚気論争に巻き込まれている。また、山根正次は長崎市の衛生状態の改善や、朝鮮のらい病院の設立には大きな貢献をした。磯部検蔵は山根正次の部下であったが、山根が朝鮮顧問官として朝鮮に長期滞在したために、日本医学専門学校の経営は専ら磯部に任されていた。しかしながら、磯部検蔵は貧弱な学校設備の改善を行おうとせず、しかも入学した学生達には、卒業時には帝国大学医学部のように無試験で医師開業資格 (卒業とともに医師の資格が得られ医師国家試験を受ける必要がないという、いわゆる指定校認定) が得られるという空手形を与えていた。この時点で日本医学専門学校は指定校認定には程遠い状態であった。一方では磯部は山根理事長が留守の間、滝沢竹太郎理事と確執を繰り広げていた。また学生達から設備補充という名目で、追加の学費を取っていた。

第一回入学の学生達の卒業を控えた大正4年12月18日、学生達は1. 文部省からの無試験合格の認定獲得、2. 学校設備の充実、3. 権力闘争の終止 (磯部理事の退任)、などの要求を、血判状連署の上、磯部検蔵に提出した。磯部検蔵ら学校側は学生達の行動を甘く見て、放置し続けたので、その問題は年を越えて続いた。12月20日には学生達は山根正次を訪問している。山根は涙を流しながら、

「自分も之から献身的に尽力しよう。諸君にも同情に堪えぬ。」

と云って学生達を帰すが、事態は一向に改善しなかった。翌年1月から3月までは、各学年の進級試験があつたので大きな紛擾は起らなかった。4月には新一年生が入学してきている。

しかしながら、新一年生も学校の状況を知り、5月1日になって血判連署し、ストライキに参加することとなった。この時期より学生側の行動は過激となり、連日学生大会を開くことになる。その経緯はのちに学生達によって編纂された「奮闘の半年」<sup>5)</sup> に詳しく記述されてある。一方では学校側は協力する学生の懐柔

を盛んに行った。

5月以降、学生側の保証人会も学生に同調して会議を頻繁に開いた。明治から大正時代にかけて、我国においては、地方出身の学生は在京の先輩が保証人になることは稀ではなかった。広島県では東京に芸備会や芸備医会を設立し、広島県出身の後進の援助活動を行っていた。また、学生保証人の一人であった井上角五郎（長委三美（ちょう・いさみ）の保証人）は広島県福山の出身であるが、若き日には同郷の先輩を頼って上京し、その後福沢諭吉の庇護を受け、産業界と政界で大成した。高橋琢也も同郷の船越衛（兵部大丞）<sup>6)</sup>を頼って上京し、東大南校教授方をへて陸軍参謀本部翻訳官となっている。日本医学専門学校の学生保証人会には頭山満（福岡）、井上角五郎（福山）、高橋琢也（広島）、中濱東一郎（なかはま・とういちろう）（高知）、茅原廉太郎（かやはら・れんたろう）（東京）らの著明な人達も保証人会に名前を連ねていたが、5月の段階では、大きな活動は行っていない。「東京医大五十年の歩み」<sup>7)</sup>には、

「総退学の時（5月16日）に保証人として先頭に立ったのは大角桂蔵氏であったが、その直後から学生団に同情して新校創立に熱意を示してくれたのは日南・福本誠氏と支那革命の指導者支那浪人寺尾亨博士であった」

と書かれてあるように、むしろ当初は大角桂蔵（おおすみ・けいげん）柔道家）や諏訪亀太郎らが保証人会を引っぱっていた。しかしながら、大角と諏訪は感情的に対立し、学生達がなだめることもあった（奮闘の半年）<sup>8)</sup>。また、原三郎の保証人であった奥宮衛海軍少将も途中で保証人会の責任者を降りている（6月2日）<sup>9)</sup>。そこでアジア主義者として有名であった頭山満（9名のフィリピン留学生の保証人であったと考えられる）が保証人代表に推された（5月31日と6月2日）<sup>9)</sup>。しかしながら、頭山満は際立った動きはしていない。それは5月6日に磯部検蔵理事が頭山満の名前を利用して扇動する行動に出たことと関係しているであろう。頭山満は盟友である寺尾亨と福本誠に保証人会（6月12日の学生後援会懇談会）<sup>9)</sup>に参加してもらい、以降は二人に託したと考えられる。寺尾、福本は福岡藩校の修猶館（しゅうゆうかん）の出身であり、法学校（のち東京帝大法学部）の同期生であった。修猶館中学（明治43年卒業）出身の三輪新一（東京医学専門学校を大正7年卒業、初代同窓会会長）、上野賢太郎（東京医学専門学校を大正7年卒業）、原田浩

平（東京医学専門学校を大正7年卒業）らは同校の先輩であり保証人であった寺尾亨を訪問したが（恐らく5月下旬か）、それ以降、事態は新医学校の実現に向けて大きく動き始めたのである。「奮闘の半年」<sup>8)</sup>の中には、安部路人の文章として

「烽火は初めに九州より上がった」と書かれている。また「奮闘の半年」の中の寺尾亨の檄文<sup>9)</sup>には

「吾輩は日本医専門問題勃発当初は、唯新聞紙上で見て居た丈であって、深く其真相を識るに由なく、加之、吾輩の学問（法律）とは全く違ったものであったから、深く意に介する事もなく、謂はば路傍の人であった。この時に当り、一日該校学生の二三の者が突然来訪せられて本問題に関する実相を陳述せらるる所があった。其の学生と云うのは吾輩と同郷の者であって、何れも本問題に関して多大なる利害関係を有し、且つ傷心困憊其極に達し、然も負筈遠く都に出て、盤根錯節茲に数年、志成るなくして如何にか父兄に見ゆるの面目やあるべき、願はくは一瞥の力を添へられたしと、赤誠汪るる若者の紅頬には涙潜然と止めもあへず語ったのであった。」

と書かれてあるのはこのことを示している。寺尾邸はしばしば学生達の会議の場所ともなった（東京医科大学五十年史）<sup>8)</sup>。三輪新一、上野賢太郎、原田浩平らは、大正5年3月には日本医学専門学校の卒業資格を得た4年生の学生であったが、4月以降も在学する学生達と行動を共にし、医師国家試験を受けずにストライキを支援した「旧4年生」といわれる一団の構成員であった（41名）。他の多くの同級生、とくに12月18日からのストライキを先導した幹部のほとんどは血判状による盟約にもかかわらず、日本医学専門学校に復帰し、卒業認定を受けたのち、6月に医師国家試験を受けている。三輪らは東京医学講習所設立後も学生団のメンバーとして残り、東京医学専門学校設立（大正7年4月11日）とともに卒業したが、国家試験は受けず、2年後の大正9年4月13日に東京医学専門学校が指定校認定を受けるまで国家試験を受けずに頑張った。後藤哲雄（東京医学講習所設立後学生団団長）、小谷無違、須藤力三、青山豪一、中本富太郎（5月以降の学生総代、森鷗外訪問）、後藤吉勇、筑紫哲路、佐々一雄、佐倉鉄馬らも旧4年生の方々であった。

寺尾亨は東京帝大法学部教授（日露戦争の開戦を支持した東大七博士の一人）であったが、東京帝大を

辞職して孫文の辛亥革命の支持者となって活躍し、ラース・ビハーリー・ボースの日本亡命にも一役買った<sup>2)</sup>。また、寺尾は中華民国憲法の草案作成にも参加し、高橋琢也とも犬養毅を通して親しい間柄となっていた。支那浪人として国民的に知られていた寺尾亨の存在と彼の新校設立に向けた戦略的な示唆は総退学した学生達には大きな精神的な支援となった。また、辛亥革命の支援を行い、小説「赤穂浪士」でベストセラー作家となっていた福本誠（日南）の参加も血気はやる学生達の沈静化に有効であった。このように学生保証人会が学生達の整然としたストライキ続行と新校設立に陰ながら大きな貢献を果たしている。小説家の大町桂月が「模範ストライキ」<sup>3)</sup>と賞賛したのはこのことである。

大正5年5月3日に学生達は文部省を訪れ、嘆願書を渡した。嘆願書の文面は

「謹而文部大臣閣下に嘆願す。吾等医学専門学校生徒一同は本校指定問題に関し、学校当局の誠意毫も認むる能わず。將に第一回の卒業生を出さんとするに際し、尚指定を得る能はざるは吾等五百余名の学生及此に伴う幾多の父兄の憂慮は今や其極に達し、学生其堵に安じ、学業に就く不能。伏而閣下の裁決を仰ぐ。我等刻下の窮状に対し此が措置を執られん事を茲に血判連署して嘆願す。」

であった。その日は文部大臣が不在であったので、学生委員8名は福原僚二郎次官と松浦鎮次郎学務局長<sup>4)</sup>に面会した。次官は

「大臣不在なり。今直ちに何等の措置を執るを得ざるも、諸君の意は諒とし居れば、今後も飽く迄学生らしき態度を続けられんことを望む。」

と述べて学生達を慰留した。なお、時の文部大臣は高田早苗<sup>10)</sup>であったが、実は高田早苗と高橋琢也とは明治30年代において孫文や梁啓超の保護活動を通して信頼関係にあった。このことは、文部省が学生達を終始暖かく対応し、冷静に動いたことと大きく関係している。また、東京医学講習所の開設促進にも有利に働いた。「東京医科大学五十年史」<sup>9)</sup>の中にも、「高田文相は学生に対しそれとなく好意的であった」と記述されている。

学生達の行動に対して翌4日に学校側はストライキの煽動を行ったとして13名の退学処分者と23名の無期停学処分者の名前を発表したのである。学生達は学校に集まり抗議集会を開いた。5月7日、学校側は教室の入口全てに釘を打って閉鎖したので、学生達は

根津演芸座で集会を行った。連日学生達は学校側に抗議を行い、処分の白紙撤回を要求するが、学校側はそれに応じないことから、学生達は保証人会のメンバーとともに学外の会場で会議を重ねた。

5月10日には学校長天谷千松の名前で父兄宛に手紙が送られている。

「拜啓益々御健勝被為在候段奉賀候。陳者今回の本校生徒紛擾事件は数日来都下各新聞に連掲致居候に付き、已に大要御承知之御事とは被存候得共、遠隔の貴地にありては固より真相御承知之筈も無之。殊に新聞紙上掲載の事実は多く針小棒大に失し、又は往々無根の事実を列記し、何等為にせんとするものの如く、都下在住の者と雖も屢々是等の記事に誤られ居候次第に御座候、元来本件の起りは本校指定認可遅延の結果、本期卒業期に迫りたる一部学生が理事者の心情又は諸般設備進行上の程度をも察知せず恣に指定認可の促進運動を開始し、血気に逸りて思慮分別を欠き、為に或る者の甘言又は詐術に陥り、其間不良学生の乗ずる処となり、一部徒党を形成して理事者に迫り又は温厚なる他の学生を威嚇し、強制的に加盟を求め、若し応ぜざるものは腕力に訴え、猥りに登校を厳禁し、犯す者には罰金を科するに至り、甚しきは勢いに乗じて大挙理事者の邸宅を襲うなど、日一日と不穩の挙動相募り候より、本校に於ては教授会を開き、主謀者十余名に退校を、20余命に停学を命じたるも尚お未だ沈静に至らず。在京保証人等は目下善後策に関し、夫々運動中に候得共、尚お此際一日も早く登校授業を受け候様、一応貴下よりも御訓戒相成 候様致度。若し此儘にして荏苒日子を重ね候わば、終に前途有望なる青年をして再び回復すべからざる悲境に沈淪せしむるの不幸なきを保し難く候条。前頭の事実御 通報 旁々右御 注意迄申上度草々 敬具

大正五年五月十日 日本医学専門学校 校長  
医学博士 天谷千松

これに対して、学生達は5月11日早朝（8時20分）に学生大会を開いた。そこで、大角桂蔵が保証人会の報告を行い、忍耐が肝要であることを訴えた。学生達は夕刻7時より青年会館において第一回の立会演説会を行い、大野晩睦（のち自民党代議士）らの熱烈な応援演説を得た。

翌5月12日には、学校側より

「今般其筋の厳達も有之。本日より授業開始致候に付、校規を遵守し遅滞なく出校可有之此段及通知候也

大正五年五月十一日 日本医学専門学校教務課

という文面の書状が学生と保証人に届いた。一方、学生達は次の陳情書を教授に送った。

「謹而教授諸先生に申す。先きに本校に於て学校当局及び学生間に紛擾を醸すに至るや、当局にては直に首謀者と見做されたるもの十三名に退学処分を、二十三名に無期停学処分を命じたり。是れ五月四日の事なりき。吾等学生は正当なる理由によれば教授諸先生の明断の下に決してこの処分を遅疑するものにあらず。然れども物平かならざれば必ず鳴る。熟々考うるに今回の処分の如きは意義なくして当局の処置の無責任なる、蓋し嘗て見ざる所也。(中略) 学生が如何に不当の処置に苦しむかを諒察せられて処分取消に付、御尽力あらんことを等しく熱望して已まざるなり。

大正五年五月十一日 日本医学専門学校学生一同

このようなやり取りが繰り返される中、学生達は5月13日の午前6時半に、大隈重信首相に面会するために早稲田グラウンドに集合したが、警察の干渉が厳しく断念した。やむなく学生委員13名は永田町の首相官邸に行つて大隈の秘書官に上申書と血涙録を渡すこととなった。

### 3. 学生の総退学と新医学校設立運動の開始 (大正5年5月16日～大正5年6月2日)

問題の解決が一向になされない中、とうとう5月16日を迎えた。午後6時に本郷中央会堂で第二回学生・保証人大会が開催された。奥宮衛保証人代表からは保証人大会では学校幹部の改造の件、資金調達の件、文部省の意向の調査などについて学校側に回答を求めていたが、山根理事長は保証人大会に出席せず、交渉は不調に終わったと報告された。かつて学生達は血判状を作成したときに、もし処分者が出た場合は同盟退学することを約束していた。処分者は直ちに徴兵の義務を負っていたことも背景にあった。追い詰められた学生達は保証人会の承諾のもとに、処分された学生達への盟約を守つて学校からの総退学を決議したのである。「東京医大五十年の歩み」<sup>7)</sup>の中には、日本医科大学雑誌(昭和15年)の資料を引用して、退学届けを出した

学生数は正式には427名であったことを記載している。そして幹部の学生達は新医学校設立に向けて水面下での行動を開始することとなった。学生達と保証人らは万歳三唱をなして夜半11時15分にこの会を解散した。折りしも外は細い雨が降りしきっていたとのことである。

この時期、欧州は第一次大戦最中で、欧州戦線のベルダンの戦いは酸鼻を極めていた。我国はドイツに戦線布告し青島攻略戦に参加したものの総じて平穩であった。この中であつて、500名近くの行き場のない医学生団の集団を如何に取り扱うかが大きな社会問題となった。のちに学生達を支援し、東京医学講習所の開設と東京医学専門学校設立に大きな役割を果たした石黒忠憲男爵によると、

「誰か此の憐れむべき学生を救わなければ実に恐るべき大惨事が起こるのであろう。何となれば、彼等は化学の素養あり、医学を修めて居るから種々の危険物を造る事は訳ない事だから」

と、学生の救済は一日も早く行わなければならないと言っている。東京帝大医学部教授・青山胤道や代議士・島田三郎は学生を全国医科大学に組み込むという案を文部省に提出していた。これはまさしく吉良邸討ち入りを果たした赤穂浪士が全国各藩にお預けになったことと同様な考えであるが、文部省はこのやり方は経費の面から難しいという結論であった。また、当時の文部省は問題收拾については具体的な解決策を提示出来なかった。

5月末になると、鉄壁の団結を誇つた学生達も事態が一向に進展しないことから、分裂寸前となつてきた。この中であつて冷静な活動を続けていたのが第二学年の学生・長委三美(ちょう・いさみ)であった。長委三美(広島県・福山出身)は毎日のように広島県出身の先輩を訪問し、解決策を模索し、話を聞いて歩いている。その時の手記が大変貴重な資料として東京医科大学に残っている(東医の礎:「東京医科大学開学の礎」<sup>11)</sup>として製本されている)。「東医の礎」によると、5月30日に万朝報新聞<sup>12)</sup>の主筆であり、保証人会の一人でもあつた茅原廉太郎(華山)<sup>13)</sup>を品川・立会川の自宅を訪れている。

「5月30日午後二時 江並猛君と。波いと静けき品川より緑なすところより台場を遙か見て、京浜電車に乗り立会川に向かう。遠くは房総の連山雲煙にあり。近くは初夏の木立点二点と濃く淡く緑を出だす。都に近く乗客の往来はいと繁し。また

たく暇に立会川 停留所にはつきぬ。春をなごりし桜花物えがおに、入江の藻草ふらふらと浦風心地よく。まねきしいおり生垣のここは何処ぞ、大井の客人、華山先生の宅とぞありける。(中略) 先生曰く、「今日の新聞を一寸見たが、磯部は九千円云々を法廷に争わんか。かくとあっては、サギにあらずして何ぞや。驚くの他なし。」

茅原廉太郎は加藤高明男爵<sup>14)</sup>と後藤新平<sup>15)</sup>への紹介状を長と江並にしたためてくれた。そして彼らを近くの卵屋へ連れて行き、ゆで卵をご馳走してくれた。

「先生卵を平らげる。3つ。小生らは2つ。ここにお茶を召し上がれと塩せんべいを出したの、いとあやしき二九の乙女ありける。文士はあやしき男というべきか。」(中略) ここに四時半、先生と暇をとり、夕風いと心地よく。品川湾頭、百帆を見ながら散歩し、鈴が森に至りぬ。ああ、思い出しぬ。東海道五十三次を。このやかましき宿を。ああこれが鈴が森である。恐魂何時の日にか馴染まん。ああ、思い出多き彼と是と。苔むす石に。辞世

照月 散るをおしまぬ 山の桜花

ここ一帯にあやしきもの一つ。砂風岩甚だ多き村。一帯あたたむるの暇なく。大森の浜の真砂に別れおしみて。海岸より電車に乗り、ここは高輪泉岳寺に帰り、義魂四十七士の墓に手向けぬ。ああ何れ線たゆるの時なきか。前日本医学専門学校学生団の名刺を扉に掲げた。沈目(ちんもく)して見る。」

長青年は苔むす石に辞世の句を書き込むとともに、旧日本医学専門学校の名刺を赤穂浪士を弔う泉岳寺の門扉においた。「線たゆる」とは「線香が絶える」と「学生帽の白線がなくなる(医学を断念する)」ことを懸けたのであろう。この格調高く心打つ文章には、暗澹たる将来に対する行き場のない青年の気持ちが良く表れており、この日記の中でも名文中の名文となっている。図1に長委三美(雅号は雪山)の色紙一点を載せる。

長委三美は2日後の6月1日には芸備医会の責任者、尼子四郎(広島医専出身)<sup>16)</sup>を訪問している。尼子四郎は夏目漱石の家庭医であり、漱石の家の隣(本郷区千駄木)に住んでおり、自宅は日本医学専門学校のすぐ近くであった。長委三美は尼子四郎より

「高橋琢也という義侠にとんだ先輩がいる」

ことを示唆される。長委三美は早速この話を委員会に



図1 長委三美(雪山)の色紙:長亨先生所蔵

持ち帰って報告した。この時の様子を、長委三美の下級生であった江並猛はのちに東京医学専門学校雑誌、高橋琢也追悼号(1930年)<sup>17)</sup>に次のように記述している。

「幾百と云う学生が一団となって当時の日本医専を同盟退校して善後策を講じている時、東都の名士を訪問して御同情を乞い何とかして目的を達せんことを計ってみたが、同情はしていただけるものの扱て立入って如斯と世話を下さるお方はなかったので、吾々の力では如何ともすることは出来ない。学生も次第々々に興奮し、或は悲観し遂には堅き同盟の陣容も将に乱れんとする時、委員会の席上で広島県出身の長君が高橋先生と云うことを発表したので、長君と他に二三名が先生を訪問することになった。然るに先生は新聞で時々見ていたが、お前達は若気の至りで困ったことをするものだ位に考へていたが、直接話を聞いて見ると誠に同情に堪えない。若者の為に正義の為によろしい、吾輩が此の老骨をひつさげて引受けて世話してやろうとおっしゃったのを聞いて、帰ってきた。連中は全く雀躍して喜んだのである。そして一方佐藤先生の又極めて深き同情とを結び付けて幾多の困難を排し、吾々の様な捨てられた者が一人残らず今日医業を営んで全国に



図2 高橋琢也先生御近影

至る処に仁術を施している。そして現在東洋に輝いている学校となった。その発端は如此美しい動機から起った。」

#### 4. 長委三美らの高橋琢也訪問 (大正5年6月2日)

かくして、長委三美、江並猛、藤中正 (広島県出身、おそらく高橋琢也が保証人) らは6月2日に高橋琢也 (1847~1935) を訪問することとなった (図2)。それはその後の学生達の運命を変えた大きな事件となった。長委三美のその日の訪問記<sup>11)</sup>にはその時の状況が生き生きと記述されてある。

「大正5年6月2日 前沖繩県知事 高橋琢也氏を麴町中六番町に訪う。藤中正君と。この問題が諸君等の不利となった時はただ一人のことでさえも不憫であるのにいわんや五百名の前途有望の青年、とくに五百の学生が医師となり社会に立つこととなったら実に社会を救済するので、実に大なる問題である。この問題が社会に知られんということは残念である。昨日も済世会の発会式に参列し、その席上には高木、石黒男(石黒忠恵男爵)を始め、有識名士がおられ、江湖の漫談も出たが、この問題は少しもなかった。大いにかかる人の意見を仰ぐべきである。決して紹介等要するも

のではない。諸君は大いに進んで行って尽くすべきである。これは一例にすぎぬが、吾輩の青年の時、学資なくただ無一で志を立て、笈を負って江戸に上がったのである。品川に上がるや殆んど金はなく、船越(衛)先生<sup>6)</sup>の助けによるべしと、船越めぎして行った。先生は山阪へ行っていらっしゃるといので、吾輩は然然の者である。是非先生に対面させてくれ。出来ねば出来る時まで待つ考えである。この玄関で待っていると、毛布かぶって寝ていたところが、山阪氏これをきき、まず然然と船越先生に話したそうで、通ることとなり、吾輩大いに志を述べ、それには学資なく、いわゆる飯食した上、勉強させていただきたい。勉強が目的で上京したので、頼る人は船越様あるのみ、宜しく頼みます。それなら五、六日おれとのことでありました。吾輩は五、六日云々ではいやである。もしこれは生業の見込みなきと思し召すなら、一日でも二日でもいたし出てゆけとあらば出て行きますが、ただ五、六日とはいやです。白黒をつけてもうらまではご尽力仰ぎたいと申したら、こんなやつ中々利口いな、それならまづ世話をしやろうとのことでしたが。今と時が異なるがかえって今の世が容易で、そしてかかる事情で是非お多忙の御事とは存じますが、しばらくお聞き下さいと依頼したら、誰でもはお聞きくださる。そして、血涙録なんか出すよりも大いにはなすことがいいと思う。書いたものなんか、自利のためなら見るが、まだ日本の社会ではかくまで進歩していない。赤心、誠心のこもった話であつたら鬼師も動かす事が出来るのである。同じ義太夫でも大いにそのかたり手により如何ようでもきかれるのである。大いに委員を派してあらゆる人を訪うのである。(中略) 吾輩もつまらぬながら大いに尽くす考えである。」

高橋琢也は長委三美らに各界の名士を訪問し、窮状を訴えるべきであることを諭した。以降、学生達は高橋琢也の指示に呼応して医学界の識者を次々と訪問したのである。とくに長委三美は高橋琢也の意を受けて、連日それらの方々を訪問した<sup>11)</sup>。高橋琢也は学生達に会った時に既に、学生達を救助するには新学校の設立しなく、またそれには佐藤進男爵をおいて他いないと確信していたと思われる。高橋琢也は6月2日より6月12日の間に、学生達に佐藤進を始め、佐藤達次郎、佐藤佐、三宅秀、三宅鉦一、ら佐藤進の一門を

次々と訪問させ、また森鷗外や本多忠夫 (海軍軍医総監) にも面会させている。さらには長委三美に紹介状を持たせて、東京帝大医学部出身で医学界の有力者達に隠然たる強い影響力をもっていた石黒忠恵男爵を訪問させている (6月20日)。

高橋琢也は寺尾亨と協議の上、事前にこれらの方々

に精力的に連絡をとって根回しをしていた可能性が高い。なぜなら、学生達は医学校を設立するための具体的な方法を知らなかったし、また誇り高い医学界の人達、とくに脚気論争で何十年も引かなかった東京帝大医学部学派の方々

が総退学した医学生達をすんなり面会するとは思えないからある (後述の石黒忠恵男爵の一節)。このようにして6月2日から6月12日までの間に、新医学校への道筋がほぼ確定されたのである。

高橋琢也の後には日本を代表する各界の識者が綺羅星のごとく控えていた。「奮闘の半年」<sup>9)</sup>に披露されている協賛員の一覧はほとんどが高橋琢也の関係である。しかしながら、当時の学生達はそのことを知るよしはなかった。6月2日の高橋琢也訪問を境に、学生達の展望は突然開け、事態は急展開となった。

6月5日頃に、茨城県人会の学生 (小川東洋、松岡信篤、大森彦馬) が麻布の佐藤進邸を訪問し、多大な同情を得た。原三郎名誉教授の文章には、「小川東洋の明快なストライキ経過報告にひどく同情され、男爵は早速親族会議を開いてくれると好意に満ちた返答をした。その時、男爵は自ら先頭に立つ心持を述べたらしかった。」と記載されている<sup>9)</sup>。さらに、6月8日の夕方に長委三美が高橋琢也の意を受けて、佐藤進の養子、佐藤達次郎を訪問した。佐藤達次郎は

「実に諸君には同情に堪えん。勿論私より翁父の心中如何と申すことは出来ざれども、元来親父はもともとより学校云々話もあったこともある。息 (息子) としてもかかる事を申したら何とかするでしょう。一体考えるべきは、かかる経営なんて才を有していないように見える。まず、教授の方は便利のように思える。しかし、磯部が引かんとしたらこれはどうも私立学校でいたし方はないと思う。幸い、売り出す意志があったらどうもなる事と思うが、とにかく自分は同情し、後援会にも加盟していいです。そして親父は茨城県行方郡麻生の別荘にいるから行って話してみたいだろう。」

と述べた。この時点で医学校設立の具体的な話 (下線

部) が出ているのは注目すべきであろう。佐藤達次郎はその後、東京医学講習所および東京医学専門学校の校長を25年に亘って任を負うこととなった。また、佐藤達次郎は麻生に隠居している佐藤進を訪問するよう長委三美に示唆しており、これが翌日の佐藤進訪問となった。

佐藤進は明治2年に、日本人で初めてベルリン大学医学部に留学し (国費留学生第一号)、東洋人で初めて医学博士 (ドクトル) を得た外科医師であった。佐藤進は大隈重信が爆弾テロで瀕死の状態のときに手術によって救い、また日清戦争の休戦会議に下関・春帆楼を訪れた李鴻章がテロに会った時にも治療に当たっている。佐藤進は陸軍軍医総監 (1905年) [石黒忠恵は1890年、森鷗外は1907年に軍医総監就任] を務め、長らが訪問したときはすでに第一線より引退していた。佐藤進は佐倉順天堂の第三代当主であり、佐倉藩主とは大きな繋がりがあった。一方、高橋琢也の妻、富士子夫人も佐倉藩の出であったこと、弘化4 (1847) 年生まれの高橋琢也と弘化4年生まれ

の佐藤進が幕末および明治維新の激動期に開成学校 (東大南校および東大東校の前身、のちの東京帝大) に学び、教鞭をとっていることから、高橋琢也と佐藤進との間には強い絆があったのではないだろうか。

また、高橋琢也は明治4年より明治18年まで佐藤進と同じ陸軍 (陸軍参謀本部) に所属し、佐藤と同じく独逸協会の会員であったことも、二人の日常的な交際が推測される。なお、寺尾亨 (のち、東京医学講習所開設者の一人、東京医学専門学校理事) も佐倉藩城代家老・渡辺家 (渡辺暢) と義理の兄弟関係にあったことは、後 (6月18日) の長委三美による佐倉候・堀田正恒伯爵訪問となり、佐藤進らの新医学校設立への方針を決定付けたと考えられる。大正5年当時、佐藤進は押しも押されぬ医学界の重鎮であった。長委三美は6月9日、茨城県麻生に隠居中の佐藤進を高橋琢也の紹介状を携えて訪問することになった。

##### 5. 長委三美の佐藤進男爵訪問 (大正5年6月9日)

長委三美は6月9日の早朝、上野を出発するが、佐藤進の住む麻生に到着するまで、まる一日かかっている。そのときの様子が次の文章に生き生きと描かれている<sup>11)</sup>。

「大正5年6月9日 麻生の別荘に佐藤進男を訪問う。午前5時50分上野駅発。荒川の上流、夏木立。何とこの古山親しくも存ぜられ候。今は青々



しき苗の野と相成り候。またたく間に土浦に着きしや候。ここは筑波山に至る六里の駅程の存候。ここより銚子への汽船は出で申し候。霞ヶ浦の夏景色、さこそと存候。日本晴れの景色を写して鏡のごとき湖面の色、漂う浪より生るる風は船窓にそよぎつつ。げに肌涼しう夏知らずの興に候。湖辺の縁に緑なす菖蒲、水面に移りて何ともいえず申し景やに存じ候。まして川柳の五、六の様さして、趣興いやまさりや候。やがて夕ぐれの空の彩、水にうつろう頃はこの船麻生に着き申候。一帯の湖岸、ぼぶらの夏風にそよぐ三、四の林あちこち。げにや霞ヶ浦の景よと存ぜられ候。絢たる四角のあづまやこそは聖の独りしたもうところとや。小高き岡の松林こそはすみ家したもう別荘とやら。ここさして進みや候。静けきこと太古の如しとやら。

佐藤博士申さるには、「過日も県出身の御方が参られて大略承りまして私は同情にたえません。出来る事ならどうかならぬとは思っています。誰か出てなんとか尽力せんものですかね。一昨日の新聞紙にも検事取調べとかなんとかあります。ただまだ折合いつきませんかね。実に不幸ですね。過日も更、隠しもせん、心中を話しておいたが、今妻の名で美術学校を営護しておりまして、随分金もつぎこみました。その学校も途中で火事など入り困りましたが、幸い千五、六百の学生を出し、方進は立ったようです。もともと私は何か医学校へ尽くさんとは思っています。只に患女云々ではなくて、昔は順天堂で研究生も募っていた位です、今ではすべて若いものにまかせ病院なんか殆ど出ず、月半分は此処、半分は東京で、然かも社交に用いています位で。年よりもなかなか多忙のものです。それで此事は皆様に同情して何とか出来れば尽くしてあげたい。然し今いうた様に一人できめられんゆえ、達次郎はじめ親族の者どもと会議を開き御返事する事といたしましう。」

東京医科大学五十年史<sup>8)</sup>によると、茨城県人会の学生が東京の佐藤進邸を訪問したと記載されているが、上記の佐藤進の話「過日も県出身の御方が参られて大略承りまして私は同情にたえません。」「過日も更、隠しもせん、心中を話しておいたが、」から判断すると6月5日前後であろうか。6月中旬にも小川東洋、小谷無違、寺師順一、江並猛らが佐藤進を訪問したことが東京医科大学五十年史<sup>8)</sup>に記載されているが、これは新

しい医学校設立に向けた最終的な調整のための訪問であったのであろう。この日の長委三美の佐藤進男爵の訪問によって「それで此事は皆様に同情して何とか出来れば尽くしてあげたい。然し今いうた様に一人できめられんゆえ、達次郎はじめ親族の者どもと会議を開き御返事する事といたしましう。」という言葉が引き出された。

のちに、長委三美が東京医学専門学校を卒業した大正9年に作成された卒業アルバムには佐藤進(雅号は茶崖)の書「芳流」の写真と佐藤達次郎校長の写真が大きく入っている。また東京医学講習所および東京医学専門学校の教授陣の多くは順天堂病院より派遣された方々である。東京医科大学の源流の一つは佐藤進、佐藤達次郎を中心とする順天堂病院の方々であったことはこれらのことから明らかである。

表1に学生達の訪問日程を示す。そこには佐藤進一門を中心として新医学校設立するという、高橋琢也の戦略が明確に現れている。

この間、他の学生達も同郷出身の各界の名士を訪問している。福島県出身の佐倉鉄馬は山川健次郎(東大総長)を、島根県出身の河野正夫と太田隼治は森鷗外を、古川道之助(埼玉県出身)は本多静六(東京帝大農学部教授)、成田義英(埼玉県出身)は渋沢栄一の子息・基次を訪問し、協力を得ている。この中で、医学界に大きな影響力を持っていた森鷗外を訪問しているのは特記すべきことであろう(後述)。また酒井敏雄(東京出身)は文部大臣・高田早苗と会見している。高田早苗の談として

「学校側より具体的な案、提出なき迄は彼此と当局として干渉する事能わずと。今後学生が飽く迄決心固く、復校せざる時は第三者の出ざれば、本問題は解決をせざるべし。」

とある<sup>9)</sup>。既に第三者による新学校設立を支持する発言が文部大臣よりなされていたのは注目される。

学生達の識者訪問は、高橋琢也による東京医学講習所設立に向けた精力的な指示によるものと考えられる。なお、高橋琢也が総退学した学生達の救済について医学界重鎮と既に話しをしていたかどうかであるが、恩賜財団済生会中央病院<sup>10)</sup>が発足直後の大正5年6月1日の発会式の会場でそれがなされていた可能性が高い。高橋琢也は前述のように「昨日も済生会の発会式に参列し、その席上には高木、石黒男(石黒忠恵男爵)を始め、有識名士がおられ、江湖の漫談も出たが、この問題は少しもなかった。」と述べている<sup>11)</sup>。高

表1 学生達の訪問日程

日 時	訪問先	訪問者	内 容
大正5年6月1日	尼子 四郎	長 委三美	高橋琢也を紹介
6月2日	高橋 琢也	長 委三美 藤中 正 江並 猛	高橋琢也の積極的な支援を受けることとなった。
6月5日頃	佐藤 進	小川 東洋ら	学生達は多大な同情を得た
6月8日夕方	佐藤達次郎	長 委三美	新医学校設立の示唆を得た。
6月9日夕方	佐藤 進	長 委三美	親族会議を行う旨、確認
6月10日夕方	森 鷗外	河野 正夫、 太田 隼治	不明
6月10日～12日	佐藤 佐	長 委三美	佐藤家一族として同意
	大野伝兵衛	長 委三美	佐藤一族として同意
	三宅 秀	長 委三美	同意
	三宅 敏一	長 委三美	同意
6月15日頃	佐藤 進		佐藤家の最終的な結論を確認
6月18日	堀田 正恒	長 委三美	佐藤進への駄目押し
6月20日	石黒 忠恵	長 委三美	佐藤進であれば同意 医学界からの支援を確認

橋琢也がそこで佐藤進にも会っていた可能性は高い。なぜなら、6月2日に会見した長委三美らに「佐藤男もよかるう。原、犬養も良かるう。あらゆる有識に願うのである。」と言っている。一方では、高橋琢也は寺尾亨と図って、6月12日に、万世橋ミカドホテルにおいて、第一回学生側後援会を開き、学生の支援について検討を行った。この点については、次号に詳しく述べる。

## 6. 高橋琢也の医学界重鎮や寺尾亨、高田早苗との交友関係

表2は高橋琢也と医学界の重鎮であった方々との交友関係を示す。高橋琢也は佐藤進とは旧知の間柄であり(前述)、石黒忠恵とも実懇の間柄であった。また、寺尾亨や高田早苗文部大臣とは中国亡命者(梁啓超や孫文)の保護活動を通して気脈を通じていた。寺尾亨も高田早苗とは大学での先輩後輩の間柄であり、孫文らの保護を通して実懇であった。寺尾亨は、親友・渡邊暢<sup>19)</sup>(佐倉藩城代家老の家系)を通して佐倉侯・堀田正恒に紹介状を書ける立場にあった(前述)。また、寺尾亨は犬養毅、福本誠、頭山満とは辛亥革命支援を通しての盟友であった。

石黒忠恵(大学東校出身)は森鷗外、中濱東一郎、青山胤道、佐藤達次郎らの医学部先輩であり、東大医学部学派には強い影響力を持っており、当時の医学界に

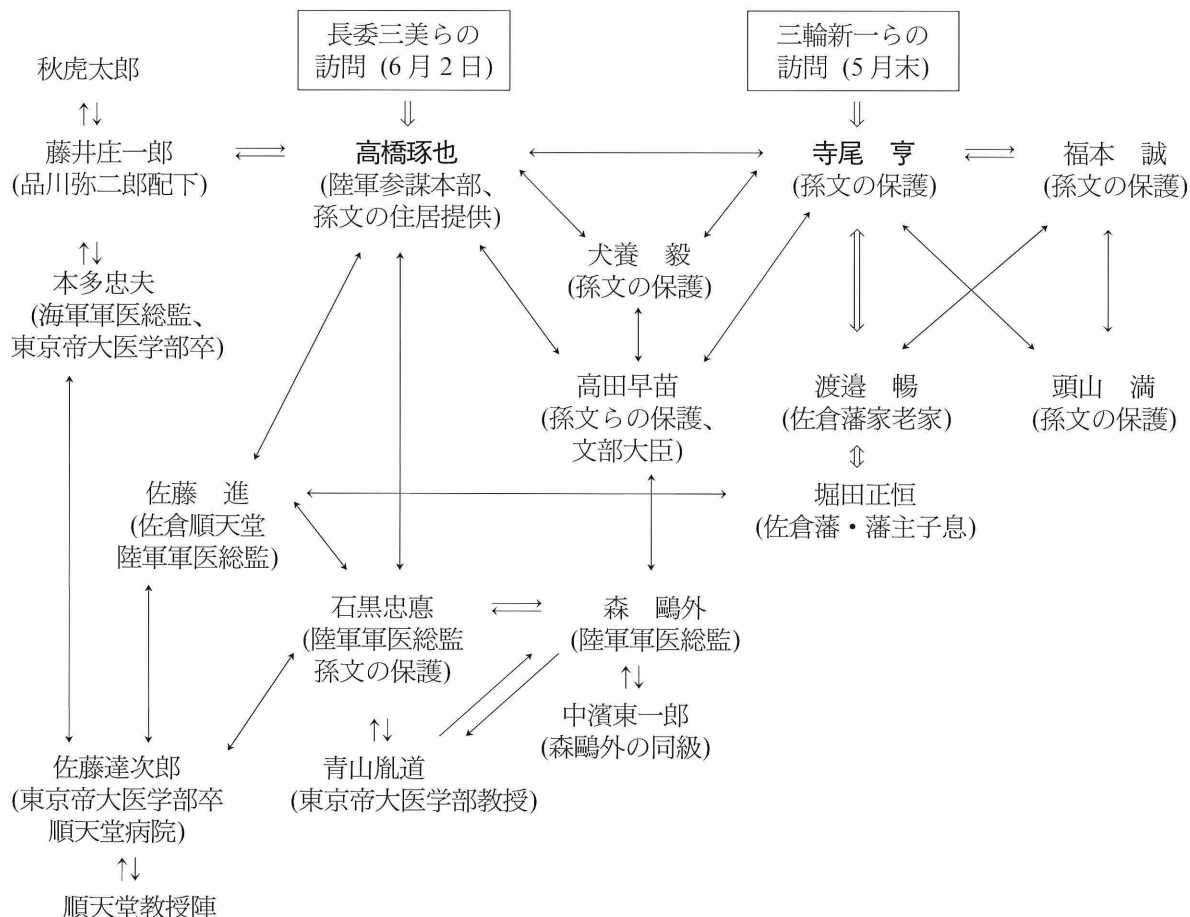
おける重鎮であった。藤井庄一郎は東京施療病院の開設に関わった初代事務長であり、品川弥二郎子爵には高橋琢也同様、庇護を受けていたことから、高橋琢也とは気脈を通じていたと考えられる。藤井庄一郎は東京施療病院の開設にあたって秋虎太郎に援助を受け、本多忠夫(海軍軍医總監)は東京施療病院の初代院長を兼任していたことなどから、両氏とは実懇の間柄であった<sup>11)</sup>。本多忠夫は佐藤達次郎とは東京帝大医学部においての知己であった。のちに学生達に親愛を込めて五名士と呼ばれた一人の福本誠(日南)は寺尾亨、頭山満とは親しい間柄であった。三輪新一や長委三美らの学生達はこのような背景があったことは全く知らずに寺尾亨や高橋琢也を訪れたのである。

## 7. 学生達の森鷗外訪問 (大正5年6月10日、7月8日、7月9日)

高橋琢也の意を受けて、島根県人会の学生二人(太田隼治、河野正夫)が6月10日夜前に森鷗外を訪問した。森鷗外の自宅(観潮楼)は日本医学専門学校のすぐ近くであり、学生達の訪問には鷗外は神経を使っていたことが想像できる。以降の学生との会見も、夜に行われている。この日の学生達との会見が、森鷗外日記<sup>20)</sup>に記録が残されている。

「大正五年六月十日(土) 晴。午前竹柴金作を馬道の家に訪う。午後神田を歩す。夜前日本医学専

表 2 高橋琢也と医学界重鎮との交友関係



門学校学生島根県人太田隼知 (正しくは隼治)、河野正夫を引見す。」

森鷗外が同じ島根県人とはいえ、いとも簡単に二人の学生達に会見している。そこには誰か仲介する人がいたと考えて良い。6月5日の森鷗外日記には、

「六月五日 (月) 晴。高田文相官第に夕餐す。」

と記されており、文部大臣高田早苗と日本医学専門学校の紛擾について会話がなされた可能性が高い。高橋琢也は懇意であった高田早苗に事前に連絡し、それがこの日の会見となり、さらに6月10日の学生達の訪問が鷗外によって了承されたのでないだろうか。長委三美 (後述の長委三美の森鷗外訪問の記) に

「其後文部大臣にも局長にも会わないで話はまだしていない。」

と話しているのはこの辺のことを示唆している。森鷗外の住居は千駄木であり、日本医学専門学校のすぐ近くであったので、鷗外には学校の騒動は手に取るように分っていたと思われる。森鷗外は東京医学講習所の開設時には顧問の一人となった。さらに、長委三美は

7月8日に森鷗外邸を訪問している。

「大正5年7月8日 前陸軍医務局長、軍医総監文、医学博士 森林太郎閣下の千駄木の邸に。薫香ゆかしき書齋に通されぬ。是七月八日午後八時。其後文部大臣にも局長にも会わないで話はまだしていない。先日も二、三度文部省へ行ったが、文展の話で大臣次官に会わないで事がすんだ。昨日、山根と中央衛生会であったが、なかなか元気はいい。復校せん学生は幾人でも首を折るとっていた。其後如何したか。今聞きし処によれば、新たに学校建つとの事で、至極結構なる事と思う。自分のもとより皆賛成ある事と思う。日本医専のような学校は望まぬが、充実したる学校は幾らあってもいいと思う。学長、教授会の件につきても大いに心配をするが、会に出る事は許してもらいたい。私は一切お断りして居る。昨日も保健会の発会式で、しかも祝始であるから、是非出てくれとあったがおことわりした次第であるから。悪しからず許してもらいたい。会に出たり主だちた

る事をするのはおれはいやだ。私の意のあることは、この度出席さる御方か手紙に書いていっている。そして佐藤さんが立ってくださる事は至極結構な事で大に賛成し又すすめる決心である。秋さんは感心な人だね。おれは一面識もない人だが挨拶くらいはしたかもしれん。おれの弟と秋さんの弟とが親しき間であるという事を聞いて居る。軍人あがりで元気あり立派な御方は木村荘介君だと思う。鈴木よりは優れていると思う。一見馬鹿の如く、心中大いに得るところある人だ。これは海軍で。陸軍では佐藤であろう。どうぞ五人の御方にはよろしくいってくれ。尚成功を祈ると。五人の中で福本君は知って居る。他の人は知らんが然し結構なる方々であると思う。」

このように、森鷗外は新しい医学校の設立を支持し、教授の人選も約束した。また、文部省提出用の東京医学講習所設立のための文書に、顧問として加わった。森鷗外日記にはこの日の長委三美の訪問については記述されていない。なお、翌7月9日に学生総代、中本富太郎が森鷗外を訪問したことが、森鷗外日記に記されている。

「大正五年七月九日（日）陰。田口文夫来て上田敏病革なりと報ず。往きて訪えば己に没せえり。乙骨兄弟、田口らと後事を議す。夜前日本医学専門学校総代を引見す。」

森鷗外はこの年の4月に陸軍を退職しており、公的なしからみから開放され、学生達の応援を遠慮なく進められたことは学生達にとって幸運であった。

#### 8. 長委三美の石黒忠恵男爵訪問 （大正5年6月20日、9月某日）

長委三美は森鷗外の訪問に先立ち、6月20日に石黒忠恵男爵を訪問している。佐藤進による新医学校設立が確定していた時期であった。石黒忠恵は「佐藤進なら大いに賛成である」と、長に述べている。雑誌「国論」（東京医学専門学校設立祝賀号<sup>21)</sup>にその時の訪問記が次のように掲載されている。ペンネームが長一外となっているのは森鷗外を意識したのであろうか。

「古日記より 長一外（佐藤なら吾輩は賛成だ）

回顧すれば大正5年5月16日。学生は同盟退校をなし保証人は之を承任すの決議を本郷中央会堂で敢行した夜であった。既に二星霜になる。大正七年花咲く四月十二日、遂に認可は下付され

た。我々は高橋先生の大努力はどこまでも感謝せねばならぬ。夫には吾々は自重して大いに学び一日も早く指定獲得を期せねばならぬ。兎角騒ぎの後には心も落ちつかず、惰性が付き易いものであるが、何事でも出来ない事はないと云う事を知った。吾々は此の勢力と此の奮闘を以って今度は天下の学生と戦わねばならぬ。然して此の認可と同時に高橋先生は佐藤博士を校長並びに病院長に推薦したことは吾校前途の爲め甚だ慶賀すべきである。

思い出せば六月の極暑い二十日であった。高橋先生の紹介状を持って、万吉柴田君と牛込揚場町の石黒男爵邸を訪問した。男爵は佐藤なら吾輩は賛成だと云われた。男爵の吾々の爲めに後見された事は一通りではない。茲に謹んで感謝する次第である。男爵は筒袖に袴で、「己れは石黒だ。折角の事であるが、高橋君の紹介があるから御目にはかかるが日本医専の学生としては面会は謝絶する。それは紛争中の学生であるからだ。高橋君には其事を己れからも云うが、かく云ってくれ。」兼ねて男爵佐久間象山先生に面会を求められた奮った記を読んだ事があるので、「甚だ失礼ではありますが、私共は勉学を中絶した先生の後輩として一貧書生として何分にも御指導を仰ぎたく存じますので、何卒ご面会を御願いたします。」と申し上げたら先生心よく「それなら日本医専の学生でなく個人として面会しよう」と面会の栄を賜った。先生曰く、「両君は所謂日本の医学が如何なる経歴を持って今日あるを知らんであろう。日本の医学なるものは支那から始めて入り来たものであるが和蘭と交通するにつれて西洋の医学なるものが入り来つて、所謂東京医学と西洋医学と衝突が起った。大に争ったものであるが、己共は西洋医学は科学の発達しとる点から之による可しと時の大井文務卿に主張した事がある。中には万事英国蘭国に習ってやって居るに、医学のみ独国に学ぶと云う事は不当であると云った人もあったが、結局大沢君等第一回の洋行をした。其時己れも同行して居つたら或は大政治家になっていたかも知れん。ハハハハハハ。（中略）扱て我國の現今医界を見るに、医者には是れで十分だ。是よりは大いに良医即ち学力の進んだ医者を要求すべきだと思う。不完全の私立医学校は全々不賛成である。「一体如何なる理由でかく騒ぎだした

のか。」さあここだと二人今までの経過を述べたら、先生「実に四十円取った学校理事は不埒な奴だな。」「そーして両君は己に何を要求するのだ。」「実は此四百五十の学生の救済方としての三ヶ条を申し上げ、結局新設学校の必要を説き、就ては麻布に佐藤男爵を、本郷西片町に佐藤博士を訪問せし結果、多大の同情を賜った事、ぜひ佐藤先生に立って頂きたいと思うので、恐れ入りますが、男爵閣下よりも御勧め下さるよう御願ひ致したいのであります。」「そうか、佐藤が出て諸君を救うてくれれば此事は易い事だ。実に佐藤は人格が立派であるが、其の人格の美よりも財産の富よりも、臨床講義の完全の事である。あれだけの臨床講義は百や百五十万の金では買えぬよ。」医学生も多くは女に失敗する不良青年を作るのであるから。己れも五百の学生を救いたいものと考えていた。

不完全なる私立医学校の建設は不賛成であるが、「佐藤なら吾輩は賛成だ」大に佐藤君（達次郎）の美拳に対しても良い事で。勧めておこう。」

長委三美は高橋琢也にその日の報告を行ったが、そこで高橋琢也は

「石黒にはなかなか会えなかつただろー。それで十分である。」

と述べている。高橋琢也は明治4年より明治18年まで陸軍参謀本部翻訳局に所属していた。上司は明治時代を代表する知識人といわれる西周（にしあまね）<sup>22)</sup>であった。また、高橋琢也は陸軍法典の編纂を行っており、陸軍の法律専門家として知られていた。高橋琢也は同じ陸軍医務局に所属していた石黒忠恵とは旧知の仲であり、石黒の性格を良く知っていた。石黒忠恵はその後、東京帝大医学部出身で医学会の有力者の協力を取り付けたり、中濱東一郎（森鷗外の同級生、ジョン万次郎の子息）<sup>23)</sup> 所有の回生病院の買収、東京医学専門学校のための東大久保敷地の斡旋、そして恐らく森鷗外が東京医学講習所設立顧問として入ることの承諾（文部省提出書類に必要であった）等、陰の立場から強い支援をしてきている。石黒忠恵は孫文が高橋琢也邸に匿われていたときに、掛り付け医師として孫文の診察に密かに訪れていることが憲兵の報告書に残されているが、高橋と石黒の強い繋がりを示している。石黒忠恵は、雑誌「国論」に二度も論文を寄稿している。6月20日の石黒忠恵訪問の報告に対して、高橋琢也は長委三美に

「近々の内に、新たに入った後援会の人の懇談会の必要がある。大器晩成にやるこそ必要だ。」とも語っていることから、高橋琢也の思惑どおり、新校設立の準備が出来たことが伺われる。

石黒忠恵は東京医学講習所設立のさい、顧問として入ることが確定していたが最終的には入らなかった。また、石黒忠恵の名前は「奮闘の半年」<sup>9)</sup>には全くなく、わずかに東京医科大学五十年史<sup>8)</sup>に僅かに触れられているだけである。しかし、東京医学専門学校認可時には評議員として名前を連ねた。長委三美は大正5年9月に石黒忠恵を再び訪れている。

「石黒男爵を。僕来ていう「主人は今日は病氣デ御座いまして、お目にかかることはデキマセンデスガ、然し折角の御訪問デスカラ少しならば面会しても宜敷いトノ事デスが如何デスカ。」「少しデモ宜しければ御面会を願います。」「今日おれは病床で長くは会えない。用事を早くいってくれ。」「協賛員にとの手紙を出し。甚だ恐れ入りますが、是非ご賛成していただきたく存じます。」「うん、おれの名を出す事はできない。それはおれは名を言わば尊敬しているのだ。それを申せなばわからんが、一例申すとだ、おれも随分医学界にも動き、また若い時は名を出したものだ。それにおれの名は薬にも何にも一として名を出して居らぬ。それはむやみに名を売らんという主旨があるからだ。」

今から二十年前と思う。おれの五十年來の友人だが、其子供が会を作っておれの名を取って出して後来ては名を借りましたと頼んできた。私はそれはならんことわり、七日しても名をとらねば、おれは告発するからそう思えと帰した。また、来て頼みいろいろいった聞かず。それなら二週間以内に名をとれ、もし取らねば告発するからと申して、二週間後行ってみればまだ名を出していたから、すぐ訴えて勝ったけれど、八円五十銭弁護士料を取られたことがある。かようにまで名を尊ずるといふ事はこうなのだ。」

このように石黒忠恵は名前を出すことを極力固辞した。また、東京医学講習所初代主幹となった秋虎太郎が憤然と非難した某富豪男爵とは恐らく石黒忠恵のことを指しているのであろう（「奮闘の半年」<sup>9)</sup> 十二月十三日病中誌す）

「予曩に学生よりの要求として某富豪男爵に面会せよ、学生に対し大に同情せられつつありと。予は其の如く男爵に面会せり。男爵は予等の口を開

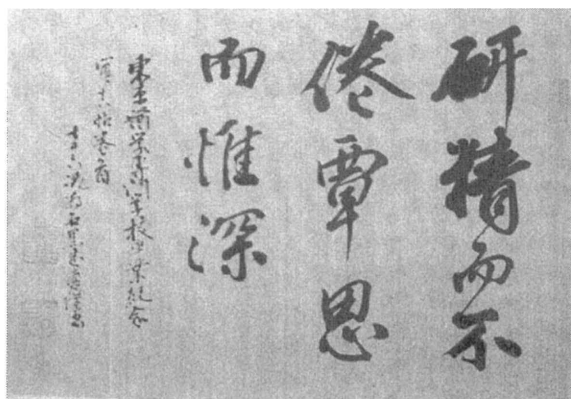


図3 東京医学専門学校 (大正9年) 卒業記念の書 (石黒忠恵男爵)

くや、彼の学生のことは自分関知せず。寄附杯は到底出さず。又寄附を他に勧誘すべく、拙者の名を貸すことも勿論謝絶すと。予は始め学生が同情あり、面会を頼むと要求したる時、既に此言あることを予期せり。成程学生と男爵との間には未だ談の熟したる迄に至らざりしならん。然れども其拒絶の先走りて寧ろ防備的なる頗ぶる其人の真価を發揮するに足る者ありし。予は中古彼れが富を作る手段を知れり。故に彼が拒絶の言を恠まず。彼れ今老年に及び巧妙なる弄策を以て慈善者の名を売り、以て社会群集の突撃を免がれんとしつつあるなり。社会は誤って彼を慈善家と称す。」

明治時代の医学界を揺るがした脚気論争<sup>24-26)</sup>では石黒忠恵は森鷗外とともに「細菌説」をとり、高木兼寛 (慈恵医科大学創始者) や山根正次 (日本医学専門学校設立者)、北里柴三郎 (慶応大学医学部設立者) らの「食物原因説」と対峙していたこと、また山根正次が紛争当時の日本医学専門学校・理事長であったことなどが背景にあったため、石黒忠恵は表に立つことは出来なかったであろう。森鷗外も同様である。長委三美の卒業アルバムには東京医学専門学校学生達に宛てた石黒忠恵の書「研精而不倦草思而惟深」(図3)が入っているが、石黒の学生達に対する暖かい気持ちとその真意がここに表されている。なお、石黒忠恵は東京医学専門学校の第二代校長、東京医科大学初代学長を務めた緒方知三郎の名付け親であった。(以下、続く)

## 謝 辞

「東医の礎」の原稿を東京医科大学にご贈与下さり、また「東京医科大学開学の礎」の本の発行にさいして

多大なご示唆を戴きました長委三美先生のご子息・長亨先生 (東京医学専門学校・昭和19年卒業、平成21年7月20日ご逝去) に深甚の謝意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

## 文 献

- ヘルマン・ヘッセ (Hermann Hesse, 1877~1962): ペーターカーメンチント (Peter Carmenzind) 郁文堂独和对訳叢書、郁文堂、1960  
旧約聖書の冒頭は「始めに言葉ありき」であり、ゲーテの小説「ファウスト」では「始めに行動ありき」が冒頭の一節にある。
- 東京医科大学校歌第一番: 「ヒポクラテスの名によれる ギリシャの昔その道の 光明西のあさぼらけ 東亜はさらに遙かなる 神話の蔭におう跡 源流二つ彼と此れ 世々に広めしいさおしの 仰がざらめや尊さを」
- 中島岳志: 中村屋のボースーインド独立運動と近代日本のアジア主義。白水社、2006
- 高速自動車: 寺尾亨の盟友であった杉山茂丸の所有であり、憲兵の車も追いつかないほどの高速であったといわれる。高橋琢也、寺尾亨、福本誠、大角桂蔵、秋虎太郎が7月15日に開催された学生大会の会場に乗りつけたのもこの車であった可能性が高い。「奮闘の半年」<sup>5)</sup>の中に「自動車の響きするよと見る間に高橋、大角、秋、寺尾、福本の五先生来場せられ、議長で紹介、謝辞ありて後諸先生は壇に立たる。」と記述されてある。我国におけるタクシーの営業は大正5年にスタートしているが、普及はその後であった。
- 東京医科大学同窓会編: 奮闘之半年 (復刻版) 1996
- 船越衛 (1840~1913): 広島藩重臣。明治維新後は兵部大丞となり、品川弥二郎とともに陸軍参謀本部のトップであった。のち、男爵、貴族院議員。高橋琢也は船越衛や品川弥二郎の庇護のもと陸軍参謀本部で陸軍法典の編纂にあたった。これには高橋琢也のドイツ語や英語、オランダ語、フランス語、イタリア語、ロシア語の語学力が必要とされた。船越衛の子息、船越光之丞は東京医学専門学校設立時の協賛者の一人となっている。
- 原三郎: 東京医大五十年の歩み。東京医科大学同窓会、1966
- 東京医科大学同窓会編: 東京医科大学五十年史。東京医科大学同窓会、1971
- 松浦鎮次郎 (1868~1945): 愛媛県宇和島出身。東京帝大法学部卒業後、内務省に入った。文部省参事官、専門学校局務長、文部次官などを経て、昭和4年九州大学総長、昭和15年には文部大臣となった。松浦は東京医学講習所を専門学校にすることに最後まで反対したが、高橋琢也が大正7年4月に文部省を訪問したおり、高橋の壮絶な決意と誠意を理解して、医学校への昇格を承認した。高橋琢也の葬儀には福岡より上京して参列し、その後

- 東京医学専門学校の評議員となった。高橋琢也の真意を知ったのちは東京医学専門学校をつよく応援した。
- 10) 高田早苗 (1860～1938)：東京帝大文学部卒業。大隈重信とともに早稲田大学創立に貢献した。1907年には早稲田大学総長。大正5年当時、大隈内閣の文部大臣であった。高橋琢也とは梁啓超の日本亡命を助けて、親しい間柄であった。
  - 11) 長委三美：東京医科大学開学の礎 (東医の礎)。東京医科大学、2008
  - 12) 万朝報新聞：明治25年、黒岩涙香によって東京で創刊された新聞である。内村鑑三や堺利彦、茅原華山らがいた。反権力を貫き、大衆文学の普及、英文欄の創設など近代の新聞紙の発展に関する功績は大であったといわれる。
  - 13) 茅原華山 (1870～1952)：茅原廉太郎は本名。万朝報新聞の主筆。日本人として初めてアイスランドを訪問。大正5年には万朝報新聞を退社して、執筆活動を行っていた。長委三美は茅原華山に私淑しており、自分も雅号を雪山とした。大正5年8月15日に渡米した。
  - 14) 加藤高明 (1886～1926)：大正5年10月より大隈重信の後を受けて、内閣総理大臣となった。長委三美は何度も面会に足を運んだが、最期までかなわなかった。日本医学専門学校理事長・山根正次の所属する立憲同志会の首脳であったためか。
  - 15) 後藤新平 (1857～1929)：岩手県水沢市出身。須賀川医学校卒業後、内務省に入る。児玉源太郎陸軍大将とともに台湾の統治にあたり、民政の責任者として台湾の安定と発展に貢献した。大正5年当時は逓信大臣であった。関東大震災後の東京市長として東京市の都市計画を作成し、東京市の建て直しに尽力した。長委三美は茅原華山の紹介状をもって、後藤新平を何度も訪問し、親しくなった。
  - 16) 尼子四郎：1887年に広島医学校を卒業。1903年に東京で開業。芸備医会の責任者で「医学中央雑誌」を創刊し、我国の医学研究の発展に寄与した。夏目漱石著「吾輩は猫である」の甘木先生のモデルといわれる。なお、漱石著「三四郎」のモデルは、東京医学専門学校ドイツ語教授、小宮豊隆であるといわれる。
  - 17) 東京医科大学雑誌 (高橋琢也追悼号) 1935
  - 18) 恩賜財団済生会病院：済生会は明治44 (1911) 年2月11日に、明治天皇の「済生勅語」により、皇室からの下付金と在野の寄付金を併せて創設された。運営は内務省が行い、事業計画は地方自治体に委託した。東京済生会中央病院 (初代院長：北里柴三郎) は大正4年12月1日に開院したが、翌年6月1日に開所式を行った。
  - 19) 渡邊暢：佐倉藩城代家老の家系。明治維新後、法学校に入学し、そこで寺尾亨、福本誠、原敬と親しくなった。寺尾亨の妹と結婚した。朝鮮大審院の院長。朝鮮三・一独立運動の指導者を軽刑に処したことが、現在では高く評価されている。
  - 20) 森鷗外：大正五年日記 (鷗外全集)。岩波書店 (絶版) 1989
  - 21) 国論 (東京医学専門学校創立記念) 4巻5号 1918
  - 22) 西周 (1829～1897)：森鷗外と同じく、鳥根津和野市出身。明治初期の啓蒙家、教育者。陸軍参謀本部出仕。高橋琢也の上司であった。高橋琢也著「森林杞憂」の叙説を書いたくらい、高橋とは親しい間柄であった。
  - 23) 中濱東一郎 (1857～1937)：ジョン中濱万次郎の子息。森鷗外とは東京帝大医学部の同級生 (明治14年卒業)。ミュンヘン大学ペッテンコーフェル教授のもとに留学した衛生学の専門家。東京医学講習所開設に当り多大な支援を行い、内科学臨床研修は中濱回生病院で行われた。また、回生病院は東京医学専門学校に売却され、博済病院 (佐藤進の命名) となった。
  - 24) 板垣聖宣：模倣の時代 (上巻、下巻)。仮説社、1988
  - 25) 吉村昭：白い航跡。講談社、1994
  - 26) 野村茂：北里柴三郎と緒方正規。熊本日日新聞社、2003